

蜂に蜜を集めさせているときには、だれも口をきかない。そんな印象をジャネットは持っていたが、実際にはハッチエンス夫人がゆつくりと、絶え間なくしゃべっていた。夫人がそんなことをするのはこの作業のときだけだし、べつに何かを伝えたいわけでもなく、ただの問わず語りにすぎない。特別な目的があるのでもない。夫人のおしゃべりは皆の気持ちを鎮めてくれる「音」なのだ。蜂と、夫人自身と、それから手伝いのジャネットがこの音に包まれ、ひとつになつて作業にあたる。この作業には、蜂をも人をも包み込んでまとめてしまう、夫人の静かだが有無を言わせぬおしゃべりが必要なのだ。

もしも「あれはおもしろかったですよ。あの中国人の海賊のお話は」などと言つたら、夫人は驚いたことだろう。そして、そんな話、した覚えないわ、私の頭の中からいつたいどうやつてあなたへ伝わったのかしら、そういうえば、たしかにそんな出来事だかその思い出だかが、あの辺にたどよつていたかもしれないわねえ、と言つただろう。むしろ夫人は、黙つていたときにもか言つたと思つたが、思い込むことが多くて、それがごたごたの原因になるときがあった（レオーナはそう信じていた）。逆に、本当に何か言つたのに、それと気づかないこともよくあつた。

養蜂というのは独特な仕事だ。作業中は自分の一部が眠つていて、終わると爽やかに目がさめる。だからジャネットはこの仕事が心底好きで、今では蜂がなくてはならない存在ともなつてている。蜂がないと深く考えることができないとでも言うように。ハッチエンス夫人のこと、最初にして最高の友人だ、最高という点ではこれからもずっと変わらない、と思っている。

この年老いた女性はジャネットに奇妙な影響を与えていた。その影響のもとでなら、まわりの世界もペースを落としてくれるから、ジャネットでもなんとかついていかれる。つまり、ジャネットに言わせれば、物事を本当に見極める余裕ができる、見たものが自分の中に入ってきて、本来の姿を現わすのを目撃する時間ができるのだ。すばらしい影響だ、これは。これがなかつたら、とうてい発見できずに終わつただろう、存在を確信できないまま終わつただろう、と思えるものがあつた。

ジャネットとメグはジェミーを通してハッチエンス夫人と知り合つた。ジェミーは夫人から呼ばれて、蜜蜂の巣箱を作つてほしいと頼まれた。そういうことには詳しいから、一二度やぶへ入つていつて、昔からこの辺にすんでいる針のない小型の蜜蜂の群を探し出してきた。それを夫人は自分の国から持ち込んだ蜂と共に飼つていた。

妹と共に初めてハッチエンス家を訪れたとき、ジャネットは母からことづかつた贈り物を抱えていた。ボウルに入れた羊肉のゼリーで、固まつた脂肪が表面を覆い、さらにその上から、ハエよけのため四隅にビーズの重りをつけたかぎ針編みのかばーがかけてあつた。メグを従え、両手でボウルを胸

の前に抱えて、町からの遠い道のりをそろりそろりと歩いてきた。夫人の家を見つけると、二人ともその立派なことに仰天し、ベランダへ通じる階段をのぼって暗く静かな室内に声をかけたが返事がないので、巣箱の置いてある谷へ通じる坂を下りていった。

夫人は遠くからでも見えた。ベールをつけた日よけ帽をかぶり、スカートのすそをたくし上げ、大きな長靴でのそりと歩く姿は別人のようだ。そこでから煙がもくもく湧き出ているから、その姿もぼんやりとしか見えない。ひと筋、斜めに差し込んでいる日の光を横切って飛ぶ蜜蜂は、まばゆい閃光のようだつた。

ジャネットは夫人が何をしているかは知っていたから、理屈ではわからないことは何もなかつたが、それでもその場面には心の片隅で何か引つかかるものがあった。ジャネットの考えの及ばない何かが、ボウルを下へ置き、痛む腕を楽にして、この光景と、それが自分の心の中に引き起こすかすかなざわめき——ざわめきと言つても、決していやな感じではない——とに集中したいところだが、とうていできそうにない。蟻どもがすでに足もとをうろつき回つてゐるからだ。今は蜂の死骸を引きずつているが、早くもボウルのにおいをかぎつけて、中身は何なのかと偵察役の蟻が這い登つてきていた。それを片足で、さらにもう片方の足で、払いのけなければならなかつた。

そんなわけで、ジャネットは夫人が作業をしている場所から一メートルと離れていないところで、ボウルを抱えたままメグと共に立つてゐた。メグはまだ蜂のことがこわくて、ジャネットの後ろに隠れていた。現に、とりわけ大胆なやつが一、二匹飛んできて、かぎ針編みのかバーにとまつて歩き回つ

ていたかと思うと、やがてジャネットの手にとまつた。ハッチエンスさんつたら、歌つてるわ、とジャネットは思つた。だが、歌つてゐたのは蜂だつたかもしれない。四方八方へパツと散つては点々と輝き、またいくつかの塊に寄り集まつて突進する。煙のにおいが鼻をつき、メグがくしゃみをした。

「おや」と夫人が叫んだ。「あなた、どこの子?」。ジャネットひとりしか見えないようだ。夫人はこちらにやつて來た。たくし上げた左右のそでのひだのあいだで、のたうちまわつてゐる蜂もいれば、ベールに点々ととまつてゐるものもある。「こわくないからね」

「こわがつてなんかいません」とジャネットは言つた。しゃちこばつてゐるのは、長いことボウルを抱えている両腕が痛いせいで。

「そう?」

夫人はジャネットをじつと見つめた。

「それに、こわがる必要もないわ。蜂は煙で眠くなるの」。そう言ふと、夫人は二人のほうへ煙を送つた。

「あらあら、二人いたの」

その後、一人でハッチエンス家を頻繁に訪れるようになり、家の中や、そこに飾つてある貴重な品々を見せてもらうようになつたが、ジャネットにとつて何よりも大きな魅力を持つていたのは夫人自身と蜜蜂の巣箱だつた。木々の下に置いてある巣箱は、閉ざされてひつそりとしているように見えるが、

中では猛烈な活動が続いている。それは人間とはまったく別の独立した生活で、独自の組織と目的を持ち、複雑な儀式がいくつもからんでいる。そんな蜜蜂と関わっているときには、人間のほうが蜂の

やりかたに完全に従わなければならず、そのところをジャネットはいたく気に入っているのだった。

いつぽうメグは、ハッチエンス夫人と共に暮らしているレオーナに惹かれていた。ジャネットも食卓で冗談を飛ばしたりからかい合つたりする皆とのつき合いを楽しんではいたが、巣箱のほうがもつと魅力があった。そしてこう考えた。蜜蜂の社会は全体でひとつの「心」を持っている。ほんの一瞬でいい、自分のこの心から抜け出して蜂の「心」の中に入り込めれば、天使であることがどういうことなかが、ようやくわかるのだが、と。

こんな考えは「幻想」にすぎないと思っていたが、実はそうではなく、もつとたしかで現実的なものだつた。蜂が興奮するのだ。ジャネットが無意識のうちに興奮させているらしい。これはジャネットの意志とはまったく関係のない外的なもので、夫人が作業をしているのを初めて見たときに始まつた。あの瞬間の感覚を思い起こすたびに、決まって両腕の痛みと、ボウルと、二重の覆いのことも浮かんでくる。二重の覆いというのは、固まつて蓋のようになつた脂肪と、ビーズの重しがついたかぎ針編みのかバーのことだ。地面を離れて、ふわりと浮き上がりたい、と思ったとしても、ジャネットはその二重の覆いで大地にしつかりとしばりつけられているのだった。だが、もつと強くあのときの感覚と結びついて思い出されることは、蜂の立てる音だ。無数の毛むくじやらの頭に鳴り響く、震えを帶びたひとつの言葉。それが全部合わさつて、いつそう大きく響き渡るさまを思い出すのだ。だか

らジャネットは、個々の体を持つ蜂がいつたい何者なのかだけでなく、なぜ存在するのかまで、即座に理解してしまつた。とろりとした蜂蜜のことや、蜂がそれを周辺一帯から集めてきた花粉から作り上げる過程を。放たれた蜜蜂は、ユーカリノキやバンクシアの花、ユータクシアの茂みで蜜を吸い、花粉を集め、沼の水を飲み、それがぼつてりとした黄金色の蜂蜜になる。スプーンですくい上げれば透明な糸となつてゆつくり垂れ、いつまでも途切れることがない。

その後、ジャネットは夫人の助手になつて、自分専用のベールつきの日よけ帽をかぶるようになり、じきにほとんど夫人に負けないほどまで腕を上げてしまつた。しかしそれより前に、ある出来事が起つた。ジャネットがじっくり腰を据えて——結局、一生——この仕事に取り組むようになるきつかけとなつた出来事が。

それはジエミーがハッチエンス家の小部屋に移つてまもなくのことだつたから、ジャネットはもう「初心者」ではなかつた。その日、蜂に蜜を集めさせる作業はすでに終わつていて、ジャネットもベルつきの帽子を脱いでいた。

いつになく蒸し暑くうつとうしい日で、ここ一時間というもの、縁の緑がかつた銅あかがね色の雲がどんよりと垂れ込め、視界がきかない。不意に森の中で風の立つ音がしたが、こちらへは吹いてこなかつた。と、ジャネットが今吸つた息を吐く暇もなく、その息が叫びとなつて出る間も置かずに、蜜蜂の群がわつとジャネットにたかつた。空がにわかにかき曇つて、いきなり夜になつたような素早さだつ

た。からうじて自分の両手が、生きた豪華な毛皮の手袋に覆われるのを見る間はあつたが、たちまち全身を覆われ、何百匹という蜂の立てる音がひとつに合わさつて——ひとつ的心となつて——それがジャネットを激しく抱きしめた。

ジャネット自身の心は体の中でぴつたり蓋を閉ざしてしまつた。あらゆる感覚が失せて、自分の足が、輪郭の定かでなくなつた両手が、今どこにあるのか、一瞬前にしていたように、ほの暗い森の中今も立つてゐるのか、それとも地面から浮き上がつてしまつたのか、まつたくわからない。

蜂はお腹がいっぱいだから刺さないわよ、と心の声が言つた。じつと立つてなさい、じつと。それはいつもの自分の心が発する声だつた。

そこで、絵の中の人物のようにじつと立ち、息もしなかつた。すべてをゆだねてしまつた。

おまえはわれわれの花嫁だ。新たにジャネットのものとなつた別の心が、地面の少し上でぶんぶん鳴り響き、揺れながらジャネットに話しかけてきた。ああ、そういうことなの！ 蜂どもはねばつこい血の流れをかぎつけた。血を蜂蜜だと思ったのだ。たしかにそのとおりだ。

ハッチエンス夫人は、ジャネットからわずか三十センチほどのところにいた。ジェミーもそうだつた。ジャネットは自分の体が立っている鈍い音のむこうから、二人が自分に呼びかけている声を聞いた。だが、こうなつては一メートル離れていようが一千年隔たつていようが、変わりがない。まつたくない。ジャネットが少女であろうが、大人の女であろうが、木であろうが。ジャネットは眠りながら立つていた。まつすぐ。花嫁なのだ。それから、喉にいがらっぽい煙が流れ込んできただと思つたら、

雲が晴れ始めた。そして、ほら、雲の裂け目から夫人が見えた。夫人の左右のそでから煙がもくもくと湧き出ている。ジェミーはぽかんと口を開け、両腕で菓籠の木枠を抱えている。蜂は一匹ずつ、やがてひと握りほどの塊になつて、外皮がボロボロはげ落ちるように離れていく、しまいにジャネットはまた自分の皮膚にだけ包まれて立つていた。その皮膚の、空気に触れているところが爽やかだ。今はもう、鈍重なやつらが二、三十匹残つてゐるだけで、そいつらは足がからまつたりして取り残され、大あわてにあわてて、毛むくじやらの頭で突いたり足で蹴つたりしている。

ジャネットは夫人の両手が自分の肌に触れるのを感じた。もう何もついていない無傷の皮膚であるにもかかわらず、まったく別の新しい皮膚になつたような気がする。夫人はおそるおそる介抱してくれ、ジェミーはあわれつぱい泣き声を立てていたが、そのあいだじゅうジャネットは少しほうつとしていた。両足で地面をしつかり踏みしめ、なかば眠つたまま、蜂が行つてしまつたことを残念がりながら。

それから何年もあとの話だが、ジャネットは蜂の専門家になる。ハッチエンス夫人にはおそらく思ひもよらなかつたような優秀な専門家に。雑種も含めてあらゆる品種を知り尽くし、新種さえひとつたり出した。ジャネットが名づけてやるまでは人類に知られることもなかつた群を生み出したのだ。蜂という生き物に人生をささげて、日々実地の研究を重ねた。習性を調べ、データを集め、蜂と人間の長い関わり合いの歴史という知識を吸収し、あの瞬間、あの木の下で、この肉体を通して味わつた、あのすばらしい経験について考え続けた。あのときジャネットの心は、一瞬ではあつたが、

蜂が作り出す肉体のない心となり、万物の変遷と神秘に引き込まれたのだつた。

「いうのも、あのときジャネットを求めたのは蜂そのものではなかつたからだ。蜂どもは羽をはやした小さな使いにすぎなかつた。武装し、毛むくじゃらの頭をした小さな天使たち。もしあのときジャネットが動転し、取り乱したりしていたら、その場で刺し殺されてしまつていたかも知れない。巨体を搖すつてぶざまに踏み込んできた愚かな闇^{ちんにゅう}入者として。

だが、こうしたことは皆、まだ先のことだ。今、ジャネットは自分に降りかかつた出来事の衝撃で、まだぼんやりしていたが、今度は夫人をなぐさめる側にまわつた。腰を抜かした夫人は、突然ぐにやりと溶けてしまつた岩のようにへたり込んで泣きじやくり、落ち着きを取り戻すまでしばらくかかつた。

「氣を鎮めてくださいな、おばさま」。ジャネットはいつぺんにいくつも年を取つてしまつたような気がしたが、声はふだんと変わらなかつた。「蜂は私に傷ひとつつけませんでした。なんにもしないつてわかつてましたし。前におばさまが教えてくださつたことを、私、覚えてたんですから。お言葉のとおりでした、刺しませんでした」

夫人がジャネットほど蜂を信じていたわけではなかつたことが、顔を見てわかつた。

そう、ジャネットを救つたのは、それだつた。固く信じる心が持つ力。単なるひとつ出来事を奇跡に変えてしまえるほどの信念の力。

ジャネットはなかば夢見ごこちで歩み寄り、巣箱を見つめた。どれも今はぴつたりと蓋をされて、

あの雲が、まだぶんぶんうなりながら四角な箱の中に閉じ込められている。それがさつきジャネットの全身を覆つた。生きた暗黒。だから光明といえば、生きた粒子として、小さな炎の集まりとして蜂が作り上げた「皮膚」に覆われ、空洞と化したジャネットの内部から発せられていた光だけだつた。

炎の皮膚に包まれながら、中に入るジャネットは終始冷静だつた。そして炎が去つていつたとき、ジャネットが取り戻したのは、新しい形を持つた、以前より簡素な自分だつた。新しい体を持つて出てきたのだ。世界は——ここが大事なところなのだが——その体と極限まで交わつてから解放した。そしてその体を、世界はこの先ずっと、いかなる状況でも壊せまい。

ハッチエンス夫人の目に、自分がちつとも変わつていいように映つてることは、ジャネットにとっては大きな驚きだつた。自分の目から見たら、今こうして自分が入つてその二本の脚で立つてゐるこの体は、少し前のものとはまつたく違つてゐるのに。

ジャネットは夫人の背後、ほんの少し前に自分が立つてゐた場所に目をやつた。そこに見えたのは、自分自身——色あせたスマックを着たおさげ髪の不細工な子供——ではなく、真っ黒に焼け焦げて、今なおくすぶつてゐる切り株だつた。目を移して、仰天したジェミーと視線が合つた途端、確信した。切り株を見ているこの目は、ジェミーの目なのだ、と。